

持続可能な生き方のための菜園教育

フリット・チョフ・カブラ

日本の読者の皆さんに *The Edible Schoolyard* の日本語版をお届けできることをうれしく思います。我々センター・フォー・エコリテラシーの使命は「持続可能な生き方のための教育」です。センター創設以来、キング中学校のエディブル・スクールヤードはセンターの戦略面で重要な役割を果たしてきました。本書は、その成果をまとめたもので、示唆に富み、役立つ内容に感じていただけるよう願っています。

「持続可能」という用語はあまりにも過剰に使用され、しばしば誤用すらされているため、この用語について、センター・フォー・エコリテラシーではどのように理解しているかを明確に述べておきたいと思います。持続可能なコミュニティとは、「将来の世代の可能性を損なうことなく、それ自体のニーズや願望を満たすことのできるコミュニティ」と定義されます。これは、大切な道徳です。それは、自分たちが受け継いだものと同じくらい多くの可能性をそなえた世界を、子どもや孫に譲り渡す責任が私たちにあることを自覚させます。とはいえ、この定義は、持続可能なコミュニティをどうやって築くかについては何も教えてくれ

ません。私たちに必要なのは、生態学的にかなった持続可能なコミュニティ設計のための実践的定義なのです。

そうした実践的定義を導き出す鍵、そしてまた、持続可能性に心を砕くあらゆる人にとっての朗報は、持続可能な人間コミュニティを一から考案する必要はないということです。私たちは、植物、動物、微生物の持続可能なコミュニティである自然の生態系を手本にして人間社会を築くことができます。生物圏（バイオスフィア）の際立った特徴は、生命を持続させる能力を本質的にそなえている点にあります。したがって持続可能な人間コミュニティは、そのあり方、テクノロジ、社会制度が、生命を持続させる自然固有の能力を尊重し、サポートし、それと協力するものとなるようなかたちでデザインしなければなりません。

この取り組みの第一歩は、自然が「生命の網（The Web of Life）」をどのように持続させるかについていくぶん詳しく理解しなければなりません。

- ・ 生態系は、何十億年もの進化の歴史にわたって基本的な生命プロセスを持続させるために自己をどのように組織化してきたのでしょうか？
- ・ 生態系は、豊富なエネルギーを用い、廃棄物もなしに、どうやって繁栄することができるのでしょうか？
- ・ 自然は、現代の最も硬いハイテク・セラミックよりも硬い表面（アフビの貝殻や重量比で鉄より五倍も強靱な糸（クモの紡ぐ糸）をどうやってつくり出すのでしょうか？

(1) 生命の網（The Web of Life）
106 頁参照

うか？

・また、この奇跡の素材はいかにして、ひっそりと、そのままの環境温度で、有毒な副産物もなしにつくられるのでしょうか？

本書のテーマである持続可能な生き方のための教育とは、エコロジの基本原则を教えることよってこうした理解を促進する教育です。それは、エコロジの基本原則を用い、体験的で参加型の学際的アプローチを通じて自然に対する深い敬意を植えつけるものです。

科学の最前線で目下台頭しつつある生命についてのシステムの理解は、三つの基本的な洞察に基づいています。すなわち、生命の基本的な組織化パターンはネットワークであること、物質は生命の網の目を絶えず巡って循環すること、すべての生態学的サイクルは太陽からのエネルギーの絶え間ない流れによって持続されることです。この三つの基本的現象——生命の網、自然界のサイクル、エネルギーの流れ——をまさに子どもたちはガーデンで経験し、探求し、自然界で直接体験することを通して理解していきます。

このような経験を経て私たちは、私たち自身がどうかたちで生命の網の一部を成しているかをも認識するようになります。自然の中でのエコロジ体験は時を経るにつれ、場の感覚 (Sense of place) を私たちにもたらしめます。私たちは、自分が生態系に、特定の植物相と動物相をもつ風土に、特定の社会的システムや

文化に、どう組み込まれているかを意識するようになります。

自然を体験し自然の叡智に学ぶ方法はたくさんあります。センター・フォー・エコリテラシーが助成しているプロジェクトの中には、河川の修復、集水域探査、アートや詩、新鮮な食品を軸にしたランチプログラム、農場と学校の提携、都市環境整備などがあります。

エコロジを学ぶ場として、子どもたちにとってとくにふさわしい「教室」のひとつはスクールガーデンです。これは、さまざまな活動を通して判明していることですが、スクールガーデンは学校で行われるほとんどのすべての活動を統合し充実を図りながら、子どもたちを食の基本（実際には生命の基本）にふたたび結びつけることができます。スクールガーデンをカリキュラムの一部にすれば、たとえば食物循環について学んだり、自然の食物循環を種蒔き、栽培、収穫、堆肥化、再生利用のサイクルに組み入れて観察することができます。こうした教育のやり方を通して、私たちはガーデン全体がより大きなシステムに組み込まれていること、その大きなシステムもまた、それ自体のサイクルをもつ生きたネットワークであることを学びます。食物循環はこの大きなサイクル（水や季節の循環等々）と交わり合い、そうしたすべてが地球という生命の網の目のつながりをなしているのです。

ガーデンでは、肥沃な土壌とは一立方センチメートル当たり何十億もの生きた微生物を含んでいる命をもった土壌であることを学びます。土壌バクテリアは、

地球上の生命を持続させるために必要不可欠なさまざまな化学的変換を行っています。命ある土壌のこうした基本的性質ゆえに、私たちがガーデニングや農業を行う際には、この大いなる生態学的サイクルの完全性を損なわないようにする必要があります。この原則は、生命への深い敬意に基づいた数多くの伝統的な農法にいまも生きており、またこうした農法は目下、有機農法の世界規模の復興の中で再発見されつつあります。スクールガーデンは、有機農法のメリットを子どもたちに教える理想的な場です。

最も重要なのは、子どもたちにとって、ガーデンに身を置くことそれ自体が驚きに満ちているということです。ある教師はこう述べています。

「スクールガーデンの最もわくわくすることのひとつは、本来ならそうした場所をもつこともなく、土や、土が育てるものに触れる機会がなかったはずの子どもたちに、子ども時代の不思議な場所を提供していることです。外へ出て、ガーデンで食べ物を育て、それを調理し、それを食べることで、教えたいすべてのことを教えることができます。子どもたちの心の琴線に触れ、子どもたちにとって生涯大切なものであり続けるエコロジを教えることができるのです」

持続可能な生き方のための菜園教育は、エコロジを理解する知性と、自然界と結びつく情感的な絆の両方を育みます。そうしてこそ、子どもたちは生命を持続させることに真に心を配る責任感ある市民へと成長します。そして、生態学的な理解をテクノロジーや社会制度の抜本的な再設計に応用する意欲を募らせてい

き、やがては人間によるデザインと生態学的に持続可能な自然のシステムとの間にあるギャップを埋めてくれる可能性を高めることになるのです。



二〇〇六年三月、パークレーにて

